No	提　案　名	提案団体名		
		代表者氏名	所　属	
９	地域資源の活用による大工町・寺町通りの賑わいづくり	宇都宮共和大学シティライフ学部内藤ﾏｰｹﾃｨﾝｸﾞ論ゼミ		
		菅　谷　　勝　平	宇都宮共和大学　シティライフ学部	
			指導教官氏　　名	内　藤　　英　二

１　提案の要旨

◎内藤マーケティング論ゼミの研究テーマ
市内大通りに面した宇都宮シティキャンパスの施設を活用して、周辺地域のまちづくりのために何ができるかを考え、実行する。

↓

◎2014 年、2015 年の「まちなかクールシェア・コンサートの体験
・コンサートに来ていた地元の人がシティライフ学部を知らない。
・大工町自治会の世帯数は５６世帯、寺町は３８世帯。

↓

◎問題意識の発生
都市の生活、経済、まちづくりを学ぶシティライフ学部の学生として、地元の大工町と寺町の為に何ができるのかを考えるべきなのではないか。

↓

◎菊水祭の山車（彫刻屋台）についての情報をまちの駅ネットワーク栃木代表の吉田恵子さん（大工町在住）に教えていただく。
・大工町は世帯数が少なくなり、高齢化も進んでいるために山車（彫刻屋台）を曳く若者がいない。
・大工町にシティライフ学部ができた時には山車（彫刻屋台）を曳く若者がいるかもしれないという期待を持つ住民の方もいた。

↓

◎『寺町マルシェ・プロジェクト』
・栃木県「大学、地域連携プロジェクト支援事業」に応募。
・寺町通りに面した宇都宮シティキャンパス学生広場を開放して、朝市（マルシェ）を実施することで、周辺地域の賑わいを創造する。
・選考の結果、採択されなかった。

↓

◎地域の課題
世帯数の減少・少子高齢化・賑わいの喪失・働く場所の減少や若年労働人口県外流出の可能性増大

↓

◎施策事業の概要

A 大工町山車（彫刻屋台）の復興
①シティライフ学部学生による菊水祭等各種祭礼への山車（彫刻屋台）の参加
②山車の運搬・組立・解体・収納等の卒業論文・卒業製作としての記録
③キャンパス１階エントランスホールでの山車の展示
④最終目標は焼失した江戸時代後期の山車復元

B 寺町マルシェ（朝市）の開催
①県内外の地域特産品による朝市
②呉服・着物まつり
③古着市・ビンテージフェア
④古本市・骨董市・フリーマーケット
⑤県内１０、県外５団体の計１５団体を招聘
⑥正福・法華・妙金三寺と連携した開催

↓

◎提案のねらい（目標）
①新旧地域資源の創造・復興による大工町・寺町・新宿町周辺地域の賑わいの創出
②①による若年層を中心とした地元への愛着の育成
③地元就学・就労、U ターン、I ターン人口の増加

２　提案の目標

宇都宮共和大学シティライフ学部のある宇都宮シティキャンパスは、旧町名でいう大工町と寺町という二つのまちの境界線を跨ぐ形で立地しています。これら二つのまちに古くからある地域資源を掘り起こし、また、現在のまちに新しい地域資源を創造することで、幼少期からまちやふる里に対する愛着を育み、生まれ育ったまちに住み暮らしながら就学、就労することを望む若者を増やして、若年労働力の県外流出を食い止め、さらに、魅力あるまちづくりを通じて、県外からの生産年齢人口の流入も促進させます。

３　現状の分析と課題

１）問題意識の発生：２０１４年・２０１５年まちなかクールシェア・コンサートの体験から

私たち宇都宮共和大学シティライフ学部内藤マーケティング論ゼミでは、宇都宮市の中心市街地、大通り沿いにある宇都宮シティキャンパスの施設を使って、周辺地域のまちづくりの為に何ができるかを考え、実行する、という研究テーマにもとづいて研究活動を行っています。

２０１４年の８月と２０１５年の７月、８月には、この研究テーマにもとづき、宇都宮シティキャンパス１階エントランスホールを会場として、４回にわたり「まちなかクールシェア・コンサート」を実施しました。

クールシェア・コンサートは、一般家庭の電力消費がピークを迎える夏の日中、家庭の電気を止めて、冷房の効いた施設に集まり、涼しさを分かち合うという、地球環境保護を目的とした活動です。

内藤ゼミでは、このコンサートによる一般家庭の節電効果に関するデータを、来場者へのアンケート調査を通じて収集、分析しようとしましたが、アンケートの自由回答を見ると、来場者の多くを占める地元東地区の住民の方々の中に、「自分の家から歩いて行ける場所に大学があることを今日、初めて知った」、「この建物が大学だったとは思っていなかった」等の意見がありました。

さらに、コンサートの開催を周辺地域の住民の皆さんに知ってもらうため、東地区連合自治会の御協力を得て、連合自治会所属の２５の自治会に回覧資料を配布していただく準備作業をしている過程で、宇都宮シティキャンパスが立地する大工町、寺町、寺町に隣接する新宿町の世帯数が、それぞれ５６、３８、３３世帯と非常に少ないことを知りました。[1)]

以上、二つの事実を知り、私たちゼミ生の間で、「都市の生活、経済、まちづくりを学ぶシティライフ学部の学生として、また、上述のような研究テーマを掲げているゼミとして、地元の大工町と寺町の為に何ができるのかを考えるべきなのではないか」という問題意識が生まれました。

資料１）平成２７年度東地区連合自治会役員・自治会長名簿

まちなかクールシェア・コンサート２０１５年８月２２日（土）

２）大工町・寺町の現状と課題

このような問題意識を念頭に、私たちはキャンパス周辺地域の大工町、寺町、新宿町について、調べてみることにしました。

宇都宮市のホームページにある『東地区・大工町自治会』の説明資料によると、大工町自治会の加入世帯数は５８世帯、加入率は１００％、大工町は１丁目・２丁目・３丁目から成る問屋・銀行・生保等の多いまちだったものが、交通事情等により問屋は卸売団地等に移転し、その後、オフィスビルが立ち並び、テナントには会社や事務所・大学・病院が入るまちになり、以前より住んでいる世帯は減少した、とありました。[2)]

寺町と新宿町については、現在の大通りから見て１本北側、宇都宮シティキャンパスの北側「学生広場」に面した道路、通称『寺町通り』に宇都宮市が設置した旧町名を説明する碑があり、これによると、この地域は正福寺、法華寺、妙金寺という３つの寺院が並んでいることから寺町と呼ばれ、３つの寺院の門前地として古着屋が沢山あった、とされています。

大工町、寺町ともに江戸時代の城下町であった頃から、町人の住む町地[3)]であって、賑わいを見せていたことが想像されますが、現在は、世帯数も少なく、大工町はバス通りでもある大通りに面していますが、寺町と新宿町は大通りから一つ北に入っただけの「寺町通り」を挟んで、病院、大学、専門学校、駐車場等が目立ち、数件の飲食業や和菓子製造販売、貸衣装など、お店も数えるほどしかなく、賑わいがあるとは言えない状態であることがわかりました。

資料２）http://www.city.utsunomiya.tochigi.jp/
大工町の世帯数は資料１）平成２７年度の東地区連合自治会資料より２世帯多い。
資料３）江戸時代の城下町の区分については、お茶の水大学大学院　寺内由佳さんが宇都宮城絵図（寛政年間）をもとに作成された資料（http://tera38.jindo.com/）を参考にしました。

３）地元の方から地域資源：大工町菊水祭山車（彫刻屋台）の情報を得る

毎年１１月に開催のシティライフ学部の大学祭『すみれ祭』では、二日目の日程の中に「シティライフ学」講演会が設定されていて、２１０５年の講演会は「新しいコミュニティの創造に向けて―人とのふれあいを求めて―」というタイトルで実施されました。

ゲストはまちの駅ネットワークとちぎ代表の吉田恵子さんと、鹿沼市でネコヤド商店街を主催されている風間教司さんのお二人で、司会は内藤ゼミの指導教官である内藤英二教授だったので、セミ生である私たちは内藤先生を経由して、講演会の事前準備段階から、宇都宮市と鹿沼市の地域資源やまちづくりに関する情報を得ることが出来ました。

特に大工町在住の吉田恵子さんからは、「大工町には菊水祭の祭礼で曳く山車（彫刻屋台）があるけれども、世帯数も少なくなり、高齢化も進んでいるので山車を曳く若い人を集めることができない」、「シティライフ学部が大工町にできた時には、山車を曳く若者がいるかもしれないと期待をする地元の人もいた」という情報を教えていただきました。また、「山車は普段、市の郊外の倉庫に保管してあり、使用するためには、運搬、組立、分解、保管などに専門の技術が必要になる」ということも教えていただきました。

これによって、周辺地域に既にある地域資源、大工町菊水祭山車（彫刻屋台）の復興という今回の提案の一つの柱が決まりました。

２０１５年１１月１日（日）宇都宮共和大学シティライフ学部大学祭「すみれ祭」
シティライフ学講演会「新しいコミュニティの創造に向けて―人との触れ合いを求めて―」

４）『寺町マルシェ（朝市）プロジェクト』

大学祭よりも前に、内藤ゼミではキャンパスの施設を活用して周辺地域のまちづくりに貢献するという研究テーマを実行するため、７月に栃木県「大学、地域連携プロジェクト支援事業」に応募し、『寺町マルシェ（朝市）プロジェクト』の計画書を作成しました。

『寺町マルシェ（朝市）プロジェクト』は「寺町通り」に面した宇都宮シティキャンパス学生広場に１５くらいのブースを設営し、地域特産品などの振興と販売を手掛ける企業や団体を県内から１０団体、県外から５団体、併せて１５団体程度お招きして、地域特産品の振興と大工町・寺町・新宿町周辺に新しい地域資源を創造しよう、という計画です。

テントや調理器具等の各種設備のレンタル料金、製品・原材料の輸送料金、参加団体の交通費等を助成金で賄い、参加団体は製品の仕入や材料費と当日の販売に要する人件費のみを負担し、イベントの運営はシティライフ学部学生が実施することにしました。

１年１回のイベント総費用を７５万円とし、２年間で１５０万円の予算計画を立てましたが、残念ながらこの学生提案は採択されませんでした。それでも、キャンパス施設を活用して周辺地域のまちづくりに貢献するという共通の考え方によるイベントであることから、今回の提案の第２の柱として、『寺町マルシェ（朝市）』を設定することにしました。

４　施策事業の提案

１）既存の地域資源である大工町の菊水祭山車（彫刻屋台）の復興

（１）菊水祭について

周辺地域にある既存の地域資源の復興を計画するに当たり、まず、菊水祭について調べました。

宇都宮市によると、菊水祭は、二荒山神社の大祭「秋山祭」の付祭りで、１６７３年（寛文１３年）から続いている、と言われている宇都宮市の代表的な祭礼の一つです。この祭りは例年１０月に、神社を中心にまちを東西に二分し、東を下町、西を上町に分け、二荒山神社の主祭神「豊城入彦命（とよきいりひこのみこと）」が鳳輦（ほうれん）に乗り、二つのまちを一日ずつ渡御（とぎょ）するとあります。[5)]

菊水祭では祭神が乗る鳳輦（ほうれん）とともに、今回の提案の対象となっている山車（だし）や屋台（やたい）が繰り出してきます。インターネットで検索した別の資料では、江戸時代の寛文１２年（１６７２年）ころからこれらの山車や屋台が作られはじめ、享保４年（１７１９年）になると宇都宮の城下町３９町の屋台が全て完成し、この年の菊水祭の『山車・屋台番組』という当時のお祭りの出し物のリストには、三番大工町の項目に、「山車。しゅろ鉾三本、屋台奴２０人」などの記載が見られるということです。[6)]

（２）山車（だし）と屋台（やたい）

ここで、私たちなりに菊水祭で中心的な役割を果たしている鳳輦（ほうれん）と山車（だし）、屋台（やたい）について、整理しておきます。

鳳輦（ほうれん）は、神社のご神体が乗るという意味で御神輿に相当するものと言えます。神社オンラインネットワーク連盟によると、山車（だし）とは、祭礼の時に人々が引いて歩く、いろいろな飾り物をつけた車の事であり、車上には鉾や人形の他に、松や杉などの木が飾られることもあり、これらは神様の依代（よろしろ）として用いられることから、御神輿と同様神霊の乗り物であって、地方によって形も変わり、呼び方も関東では「山車（だし）」または「屋台（やたい）」、関西では「山車」以外にも「壇尻（だんじり）」と呼ばれることもあります。[7)]

このように一般的に定義されている山車と屋台ですが、菊水祭などの宇都宮のお祭りで使用される山車と屋台は、どちらも神様に感謝の印として奉納されるもので、山車の場合は人形山車など、視覚的な効果を重視しており、屋台はお囃子などの音楽を奉納する為に演奏する方たちが乗ることを目的とした乗り物、ということができるようです。

（３）大工町山車（彫刻屋台）

江戸時代から沢山の山車や屋台が活躍していた菊水祭ですが、昭和２０年（１９４５年）７月１２日の宇都宮大空襲により、ほとんどが消失してしまい、その後も戦争直後の混乱や、高度成長期の市街地の区画整理等、様々な原因で散逸し、現在では、本郷町の人形山車や伝馬町の屋台など、数台が現存するだけとなっています。

本郷町人形山車

伝馬町屋台

本郷町人形山車
宇都宮の伝統文化　Vol.31（広報宇都宮 2011 年 10 月号）
http://st0011.nas931.utsunomiya.nttpc.ne.jp/ext/u_dentoubunka/u_dentoubunka_vol31_201110.html

伝馬町屋台
宇都宮の伝統文化　Vol.23（広報宇都宮 2011 年 2 月号）
http://st0011.nas931.utsunomiya.nttpc.ne.jp/ext/u_dentoubunka/u_dentoubunka_vol23_201102.html

江戸時代からの大工町の山車も空襲で焼失してしまいましたが、昭和２９年（１９５５年）に宇都宮市役所落成、市政６０周年・町村合併を記念した大規模は祭礼が実施されるのに併せて、彫刻屋台が新しく作られ、私たちがまちづくりの為に復興を計画しているのは、この屋台になります。[8)]

記録によると、大工町の山車（彫刻屋台）は、外輪式白木造白木彫刻屋台という形式で、大きさは間口１６０．８ｃｍ、奥行４１１．８ｃｍ、高さ２８８．８ｃｍ[9)]、別の資料では、昭和２９年（１９５４年）新調入魂式。大工：阿久津与平次、彫師：後藤直光（千葉市行徳）、彫刻図柄：龍、花、鳥、葡萄と木ねずみ、となっています。[10)]

（４）大工町菊水祭山車（彫刻屋台）の復興―シティライフ学部学生を中心とする

大工町にある既存の地域資源である菊水祭山車（彫刻屋台）の復興について、シティライフ学部学生が中心になって、何ができるかを考え、以下のようにまとめてみました。

①菊水祭等各種祭礼への大工町山車（彫刻屋台）の参加

吉田恵子さんから得た最初の情報に従い、山車を曳く役割をシティライフ学部学生が担当します。菊水祭の屋台渡御は昭和５１年（１９７６年）に始まったふる里宮祭りへの参加に移行しているとのことですので、当面の目標としては来年２０１６年のふるさと宮祭り、あるいは菊水祭への山車の参加協力のために、山車を曳く学生有志を募集していきます。

②山車（彫刻屋台）運搬、組立、解体、収納等の作業協力と記録

地域資源としての山車の保存のため、祭礼参加に前後して専門の技術者の方たちによって行われる運搬、組立、解体、収納等の作業にシティライフ学部学生が協力します。特に、内藤ゼミでは、これらの作業を、学内に装備されているタブレットコンピュータを使って動画で記録、編集して必修科目である卒業研究の資料として活用します。卒業研究は個人による卒業論文とグループによる動画などの卒業製作の双方の形式で提出が可能なので、山車の保存に必要な資料を活字や動画など、複数のメディアで記録していきます。

③宇都宮シティキャンパス、１階エントランスホールでの山車（彫刻屋台）の展示

祭礼への事前準備として、倉庫から搬出し、組み立てた山車を宇都宮シティキャンパスの１階、エントランスホールに展示します。宇都宮シティキャンパスは、まちの駅に登録しており、どなたでも自由に出入りしてトイレを使用したり、まちの情報を入手したりすることのできる機能を備えていますから、この機能を活用して、大工町の地域資源である菊水祭山車の情報を広く社会全般に広めます。

また、山車の規模から考えて、②の施策に従って山車の組立、分解等の知識をシティライフ学部学生が継承することで、こうした山車の展示作業は迅速に行えるようになるかもしれません。

④最終目標：消失した江戸時代からの山車の復元

大工町の地域資源菊水祭山車復興という施策の最終目標としては、江戸時代後期の作と伝えられ、宇都宮空襲で焼失した山車の復興、あるいは復元を設定しました。

焼失したのがお囃子を演奏する方たちが乗る乗り物としての「屋台」なのか、人形などの飾り物をつけた「山車」なのか、明確な情報を私たちは、まだ、持っていません。今後は関連する記録を詳しく調べて、山車と屋台、あるいは新旧の屋台のような組み合わせで、大工町、寺町、新宿町など、私たちのキャンパス周辺の地域資源を増やしていけたら、素晴らしいと思っています。

山車の復元には多くの費用と時間、労力や技術が必要となりますが、私たちは①から③の施策の実施が、山車の復元に向けての活動の契機となることを期待しています。

資料５）宇都宮市市街地整備課作成「第１２回　２００９年まちの活性化・都市デザイン協議現地説明会」（平成２１年１１月１０日）
資料６）http://www.biglobe.ne.jp/%257Eiwanee/tochigi-utsunomiya.tmh
資料７）http://jinja.jp/　神社オンラインネットワーク連盟　神社と神道　平成23年
資料８）http://www.city.utsunomiya.tochigi.jp/
資料９）宇都宮市教育委員会『宇都宮市屋台・天棚等調査報告書』平成９年３月、４７pp
資料１０）http://www.biglobe.ne.jp/%257Eiwanee/tochigi-utsunomiya.tmh

２）新しい地域資源としての『寺町マルシェ（朝市）』の創出

今回の学生提案の二つ目の柱である『寺町マルシェ（朝市）』については、内藤ゼミの中でもいくつかの意見が出ています。

宇都宮共和大学やシティライフ学部の年間予定にもよりますが、地域資源としての定着を考えた場合、開催のタイミングは、毎月第二日曜日のように、一定の間隔で実施することが理想です。

提言の第１の柱である大工町菊水祭山車復興に関連するイベントとの同時開催も重要です。

出品する商品の品目は、当初のイメージでは県内外の地域特産品を想定していましたが、古着屋が多かったという江戸時代の寺町の特性を考えれば、呉服・着物、古着・ヴィンテージ物の衣料、骨董・古本、フリーマーケットなど、多彩な商品構成を展開することも可能です。あるいは、ユニオン通りなど宇都宮市内の特定の商店街からの出張店舗やワゴンセール、寺町通り周辺の和菓子製造業やその他飲食業の出店も考えられます。

また、『寺町マルシェ（朝市）』開催には、地域住民のみなさんと町名の由来ともなっている正福寺、法華寺、妙金寺という３寺院への協力要請も欠かせません。３つの寺院が実施している年間恒例の行事とマルシェの連携など、今後検討すべき課題が多く残されていますが、どのような形態で実施するにせよ、『寺町マルシェ（朝市）』の運営にはシティライフ学部の学生が中心的な役割を果たします。

３）新旧地域資源の融合による若者にとって魅力あるまちづくり

大工町の菊水祭山車復興と寺町マルシェという新旧地域資源の融合により、若者にとって魅力のあるまちづくりを実施するのが、今回の私たちの提案の前提です。地域資源の融合、充実により、自分の生まれたまちへの愛着を育て、まちでの就学、就職を希望する若者の数を増やしていきます。地域資源の充実によって宇都宮のまちが現在よりもさらに魅力的になれば、「結婚して家庭を持ち、子どもを育てるなら、宇都宮に住みたい」と考える若者を増やすことが可能になるかもしれません。冒頭のシティライフ学講演会の講演者の一人で、鹿沼市でネコヤド商店街を主催されている風間教司さんのお話によると、地元伝統の祭り「鹿沼ぶっつけ秋祭り」へ新規起業者の若い人たちを参加させたところ，老舗・既存店舗の経営者や地元の方との交流がきっかけで鹿沼への移住を考えている人がいるそうです。

私たちは、今回の提案を少しずつ実現していき、大工町や寺町通りに賑わいを復活させ、宇都宮の町に魅力を感じる若い人たちを増やしていきたいと思っています。

今回の提案を実行していくことは、まちづくりを研究のテーマとしている私たちシティライフ学部や内藤ゼミの学生にとっても、またとないチャンスになると考えています。幸いなことに今年２０１５年１０月の菊水祭では、内藤ゼミの後輩でもあるシティライフ学部２年生の男子学生２名が、「警護」の役割を担当させていただきました。私たちも後輩の彼らに続いて、ご町内の様々な行事に参加していきたいと思います。

２０１５年１０月２５日（日）菊水祭に参加したシティライフ学部２年生